

【翻 訳】

性別変更とポピュラー・プレス——1930-1955年のアメリカ合衆国におけるトランスセクシュアリティについての歴史学的ノート(前編)
ジョアン・マイエロウィッツ

Sex Change and the Popular Press: Historical Notes on Transsexuality in the United States, 1930-1955

Meyerowitz, Joanne

富 安 昭 彦
TOMIYASU Akihiko

要旨 本稿はデューク大学出版の季刊誌『レズビアン&ゲイ・スタディーズ』(GLQ)のトランスジェンダー特集号(1998 年)で発表された、歴史学者ジョアン・マイエロウィッツの論文の翻訳である。[Meyerowitz, Joanne, "Sex Change and the Popular Press: Historical Notes on Transsexuality in the United States, 1930-1955," *GLQ: A Journal of Lesbian and Gay Studies*, 4: 2 (1998), pp.159-187.]

マイエロウィッツはこの論文のなかで、従来のトランスセクシュアリティに関する歴史認識の見直しを主張する。そして、20世紀初めにヨーロッパで興った性別変更の医療化の過程、さらに、1930-50年代のアメリカで公表された性別変更の報道などの分析を通じて、当時のトランスジェンダーの人びとが、「読むこと」を通じて、自己のアイデンティティを構築し、再形成していった過程を明らかにしている。

なお、マイエロウィッツは現在インディアナ大学の歴史学教授で、*The Journal of American History* の編集者でもある。主な編著書: *How Sex Changed: A History of Transsexuality in the United States* (Harvard UP, 2002); *History and September 11th: Critical Perspectives on the Past* (Temple UP, 2003)ほか。

凡例: イタリック=傍点、引用符・論文名=「」、書誌名=『』、訳者補足=[]。

1952年12月1日、ニューヨークの『デイリー・ニューズ』紙はクリスティン・ヨルゲンセンの「性別変更」手術を公表した。第一面の見出しには、「元 GI がブロンド美人に—手術がブロックスの青年を变身させる」と書き立てられ、その記事はヨルゲンセンがどのようにして「稀有で複雑な治療」のためにデンマークへと旅立ったかを報じた。当初のスクープはすぐに国際的なメディアの狂奔へとエスカレートした。記者たちは若く美しいヨルゲンセンに売り出し中の新進スターの役を振り当て、二週間以内に、通信社を通じて、彼女に関する5万語の言葉を送り出した⁽¹⁾。1953年の冬、ヨルゲンセンは合衆国へ戻ると、みずからの名声へと引き渡されることになった。その春、彼女はショー・ビジネスのキャリアへと乗り出し、そのキャリアは1950年代の残りの間、その名を大テントの上に掲げ、また、その身体をスポットライトの中に留めることになった。

ヨルゲンセンに充てられた新聞・雑誌報道は、外科手術やホルモンによる性別変更に関する世間の注目の殺到を引き起こしたのだが、彼女は最初のトランスセクシュアルではなかったし、彼女の記事は性別変更への最初のメディアの注目でもなかった。1930年代以降、「性別転倒」、「性別変更」、「性的变身」はアメリカの新聞や雑誌に現れてきた。これらの記事

は、ある性別として以前には知られていた人物が他の性別として生活していることが明らかにされる、といった「パッシング」についてのよくありがちな報道とは異なっていた⁽²⁾。むしろ、これらは身体的変更についての煽情化された記事であり、そうした記事はヨルゲンセンの名声より以前の幾十年の間に、アメリカの読者を性別転換の概念へと導いたのであった。

この論文において、わたしはクリスティン・ヨルゲンセンをより広い歴史的コンテクストに据えている。わたしは 20 世紀初めのヨーロッパでの医療化された性別変更の起源について、1930-40 年代のアメリカでの性別変更に関するメディア報道の特定の実例について、また、わたしたちが今ならトランスセクシュアルと名づけるだろう人びとの反応について、焦点を当てていく。アメリカの報道記事は「異性装者」への性別変更手術に関するヨーロッパ的見解と、より広く知られる間性の状態への手術とを混同したのだが、そうした記事は一部の非-間性の読者に性別変更を彼ら自身にとって実現可能なものとして構想させたのだった⁽³⁾。そこでわたしはヨルゲンセンへのメディア攻勢を最高潮のエピソードとして位置づけるべく着目していく。そのエピソードにおいては、情報発信の前代未聞の広がり、一部の読者がポピュラー・カルチャーのなかで自己のための新たな選択肢を見極めるプロセスを押し広げたのだった。

ポピュラー・カルチャーとトランスセクシュアルそのものへの重要視は、トランスセクシュアリティの歴史に関する視野の狭い学術的文献、つまり、次に見られるような短絡的な解釈、すなわち、19 世紀末、性科学者たちは、異性としてのアイデンティティ形成を、同性愛を含んだ「倒錯」と同様のカテゴリーに据えた、という解釈を訂正するのだ。20 世紀初め、同性愛が次第に同性への性対象選択を指すようになると、性科学者のマグヌス・ヒルシュフェルトとハヴェロック・エリスは「異性装」ないし「エオニズム」を、異装と同様に、異性としてのアイデンティティ形成を含めた独立したカテゴリーとして定義した。しかし、単独の性科学的な分類としてのトランスセクシュアリズムは、性別変更の治療を可能にする合成ホルモンや形成外科といった医療テクノロジーに依存していた。最近の歴史学的説明では、トランスセクシュアルたちは、医師のデイヴィッド・コールドウェルやハリー・ベンジャミンが初めて英語の用語、トランスセクシュアルを造語し、公表した時期であり、かつ、ヨルゲンセンが公的領域に入場した時期である、1940 年代末から 1950 年代初めになって「西洋の医療的、社会的景観に現れた」にすぎないというのだ⁽⁴⁾。

この論文において、ある種のトランスセクシュアル的アイデンティティがトランスセクシュアリズムという性科学的カテゴリーよりずっと以前に現れていたことを、わたしは提示していく。わたしはここでは、より以前の諸世紀や他の文化のなかに多様な形態で存在する、異性であるという感覚や間違った身体であるという感覚には言及しない⁽⁵⁾。わたしはとりわけ、手術やホルモンを経た身体的転換への欲求を通じて定義されるような、近代的なトランスセクシュアリティに言及していく。特にゲイ・レズビアン・スタディーズにおいて、いかにして、いつ、どのような形で、特定の性化されたアイデンティティが近代に現れたのかを、歴史家たちは探求しはじめている⁽⁶⁾。テレサ・ド・ローレティスが著述するように、こうしたアイデンティティは「生得的でも単なる獲得的でもないのだが、文化的に利用可能で歴史的に特有である、私的かつ公的で意識的かつ無意識的なファンタジーの形態によって、ダ

イナミックに(再)構築されたのだ⁽⁷⁾。カルチュラル・スタディーズにおける近年の研究は、読者が彼らのファンタジーや日常生活の実践を告げ知らせ、また、変容するために、マス・カルチュアに積極的に関わっていくプロセスを探求している⁽⁸⁾。トランスセクシュアリティの歴史においては、周縁化された主体は自己のアイデンティティを構築し、再形成するために、利用可能な文化的形式を用いた。1930年代から1950年代を通じて、ある読者たちは性別変更について公表された物語を自分のものとし、また、自己の感覚の中心的な構成要素として、手術的、ホルモ的な転換への欲求を取り込んだのだった。読むことを通じて、一部のトランスジェンダーの人々エオニスト、異性装者、同性愛者、倒錯者、半陰陽者といった、彼らの時代に利用可能だった用語で自己を同定した一は、彼らが誰であり、何になるのか、という新たな感覚に達したのだった。

B.C. (Before Christine)

医療化された性別変更という概念は合成ホルモンの発明や精巧な形成外科の技術の発達に依拠したのではなかった。性別変更における外科的な試みは、ヴィーンの生理学者、オイゲン・シュタイナッハがラットやモルモットの「移植」実験で国際的な称賛を博した、1910年代の初めに最初の世間の認知を勝ち取った。1912年、シュタイナッハは「雄の哺乳動物から明白な雌の性的特徴及び精神を持つ動物への任意的転換」、それに続く1913年、「男性の女性化及び女性の男性化」を発表した。すぐに科学上の古典となったこれらの論文は、卵巣を移植された、去勢済みの幼少の雄モルモットが、幾らかの雌性に関連する特徴を発達させたこと、また、精巣を移植された、去勢済みの幼少の雌のモルモットが、幾らかの雄性に関連する特徴を発達させたことを論証していた。シュタイナッハは「雄性」及び「雌性」ホルモンの一定の影響を見出したことを主張し、こうして彼の研究を、生殖腺分泌に生物学的な性的本質を据えようと試みる、より広範な世紀転換期の科学的プロジェクトに位置づけたのだった。彼の研究は医学的に性別を転換する可能性をも示唆していた。彼が述べるように、「反対性の生殖腺の移植が動物の元々の性別を転換させるのだ」⁽⁹⁾。彼の仕事はマグヌス・ヒルシュフェルトやハリー・ベンジャミン、その他の性科学者に直接的な影響を及ぼした⁽¹⁰⁾。

20世紀初めまでは、人間の「倒錯者」への外科手術についての幾つかの記録は、精巣、子宮、乳房といった身体部分の除去、つまり、進歩的な医療技術を必要としない介入の型を指しているに過ぎない。例えば、1902年、28歳のニューヨークの住人で、倒錯者、両性具有者、同性愛者、フェアリーを自称したアール・リンドは、医師に自分を去勢するように説得した。彼は表面的には性的「強迫観念」を減じるために、また、彼が健康にとって破滅的だと見なした頻繁な夢精への治療として、去勢を追求していた。しかし、彼は自分を女性とみなし、「男性の徴をひとつも持たないこと」を好むことを認めていたし、また、去勢は彼が「最も忌々しく煩わしい男性性の徴」と考えていたひげを除去するだろうと期待していた⁽¹¹⁾。オレゴン州の医師、アルバータ・ルシール・ハートもジェンダー・アイデンティティの表現として外科手術を追い求めていた。1917年、ハートは精神科医J・アレン・ギルバートに子宮摘出手術を促すように説得した。リンドの場合のように、外科手術は医療的正当化を必要としたが、この場合は月経困難症の救済であった。外科手術への希求のなかで、ハートは「異常倒錯」をもつ者への断種を促す、優生学的な論法の型をも用いたのだった。これらの議論ですらギルバート

を直ちには納得させなかったが、彼は「長い躊躇と熟考」の末にやっと手術に同意した。外科手術と断髪と服装替えの後、アラン・ルシール・ハートは「男性として人生の新たな足掛かりを得て出発し」、そして、放射線科医、小説家として成功したキャリアを歩んだのだった⁽¹²⁾。

合衆国においては、初期の外科手術に関する散発的な例があるものの、性別変更手術への希求はヨーロッパにおいて、より広範に認知されていたようだ。1916年、ドイツの性科学者マックス・マルクーゼは、より一般的な性的倒錯から、性別変更手術への希求を分離した。彼は、「A.」と名指される MTF[male-to-female]の人物が動物の性別変更実験を知り、類似の外科手術を求めたという、性別変更への衝動[Geschlechtsumwandlungstrieb]の症例を記述した⁽¹³⁾。ほぼ同じ時期、数名のヨーロッパの医師たちは身体を変形する外科手術を施行し始めた。1920年代初めまでに、女に「なることを熱望する」イングランドの二人の男たちが、「男性器を除去してくれる」イタリアの医師のことを知り、また、ドイツでは少なくとも一人の「自分を女性だと感じる」人物が「みずからの要望で男性器を除去させ、卵巣抽出物の注射を受けた」⁽¹⁴⁾。

1920年代までに、ベルリンのマグヌス・ヒルシュフェルトの性科学研究所を中心として、ドイツは人間の性別変更実験の最前線となった。ヒルシュフェルトは乳房切除術とひげの成長用の調剤を求める FTM[female-to-male]の「異性装者」に、また、精巣摘出、ひげの除去、「胸をより大きくする装具」を求める MTF の人びとに出会った⁽¹⁵⁾。ヒルシュフェルトにとって、半陰陽者、両性具有者、同性愛者、異性装者は、性的「中間者」という明確な型、つまり、生得的で器質的な根拠を持っているらしい自然による変化を構成していた。彼は異性装を「無害な性質」であると考え、異性装者の社会的容認を擁護した⁽¹⁶⁾。彼は研究対象の一部の人びとにより表明される性別変更への欲求に真剣に耳を傾け、外科手術を推奨し始めた。1931年、ドイツの医師で性科学研究所に勤務していたフェリックス・アブラハムは、近代的なトランスセクシュアルの外科手術に関する最初の科学的な報告、二人の「同性愛的異性装者」への MTF の生殖器の転換(Genitalumwandlung)に関する論説を発表した⁽¹⁷⁾。外科手術についての図解付きの説明には、精巣摘出、陰茎の切断、人工膺の形成が含まれていた。アブラハムは他にも無数の患者たちが類似の手術を望んでいると信じていた。

ドイツでの性別変更実験の話は、デンマークの芸術家でリリ・エルベとなったアイナール・ヴェーゲナーについてプレスが報道した 1930 年代初めには、より広範に知れ渡っていた。性科学研究所でヒルシュフェルトに指揮された心理学的テストに続いて、手術はベルリンでの精巣摘出で始まった。その後、ドレスデンで医師たちは陰茎を除去し、伝えられるところでは、人間の卵巣の移植をも行ったという。最後の手術、つまり、「子宮から自然な開口部」を作る試みの後、エルベは 1931 年に心不全で死亡した⁽¹⁸⁾。彼女の死後、この物語はデンマークやドイツの新聞に取り上げられ、その後すぐにデンマークとドイツで書籍の形で出版された。(書籍の方では、ドクトル・ハルデンフェルトというペン・ネームが、マグヌス・ヒルシュフェルトに見え透いた隠れ蓑を提供している。)⁽¹⁹⁾

少なくとも、1900 年頃に生まれたアメリカ人、ジェーン・ウィンター(仮名)がヨーロッパでの FTM の性別変更の医療的可能性を調べていた。彼女は「同性愛と異性装という彼女の問題に対する解決策を見出すために」、おそらく 1920 年代にドイツへと渡った。シカゴでは彼女は「自分の仲間からの孤立」を感じていたのだが、ベルリンではヒルシュフェルトの研

研究所との交流を通じて、彼女と同じような人びとを見つけた。彼女は「自身への罪悪感を捨て去るまでに、数年間に及ぶ分析」を受けた。ヒルシュフェルトはみずから彼女の性別変更手術の手配に同意した。「とはいえ、手術の後には男でも女でもなくなることを彼が警告すると、彼女は手を引いてしまった」。おそらく、ヒルシュフェルトはウィンターが生殖能力を持たなくなることを示唆したか、もしくは、機能的な陰茎を造れない陰茎形成術の未完成な技術に言及していた。いずれにしても、男として「長い時間」を過ごした後、ウィンターは第二次世界大戦の勃発でヨーロッパを去り、再びレズビアンとして暮らしたシカゴへと戻った⁽²⁰⁾。

数名のアメリカ人が性別変更のためにヨーロッパに旅立った一方で、より多くの人びとが医療的介入への新たな可能性について、マスメディアを通じて知ようになった。1930年代までに、性別変更の物語は英語で出版され始めた。1933年、ダットン社はリリ・エルベの物語、『男から女へ—性別変更の真実の記録』の最初の英語訳を出版した。その本は主人公を、女性的人格が優位となった、断続的な異装者として提示した。さらに疑わしいことには、精巣とともに「矮小で萎縮した卵巣」をもつ半陰陽者としても彼女を描写したのだった⁽²¹⁾。その本にはイギリスの性科学者、ノーマン・ヘアーによる序文が含まれていた。彼はシュタイナッハによる動物の移植実験のことを読者に知らせたのだが、エルベに施されたような「手術を実行するのは、たとえ患者自身の求めであっても無分別」であると考えていた⁽²²⁾。

『男から女へ』の出版の後、幾つかのアメリカの雑誌がリリ・エルベについて報道した。これらの記述はエルベの異性装を軽視し、疑わしい(また、ほとんど有り得なような)半陰陽を強調した。1933年12月、性差の科学に関する大衆誌、『セクソロジー』は「男が女になる」事例を掲載した。その記事は、「精神の障害」が不幸な幼少期に由来する「純粹に精神的」な倒錯者から、エルベを区別した。その差異はエルベの「身体が女性の臓器を内包する」という「驚くべき発見」にあった。『セクソロジー』誌によると、エルベの身体的状態は、以前には「動物のみに行われた」、性別変更を実行する「好機」を専門医たちに与えた。その記事は「その症例の説明が困難」であることを認めたが、なお一層の調査が「見かけの性別と性向とが鋭く葛藤するような『境界線上』の症例」への「さらなる救済」をもたらすことを示唆した⁽²³⁾。

「科学が男を女に変える時!」という別の記事は、エルベを他の真偽が定かでない半陰陽の事例に関連づけた。サブタイトルが示すように、「少年へと転換しつつある二人の少女の事例は、美女となったデンマークの画家の稀にみるドラマと対をなしている」。その記事はペンシルヴェニアの田舎出身のクレア・シュレッケンゴストとフランス出身のアリス・ヘンリエット・アクセを「両性の臓器」を持った間性者として呈示した。二人はともに、記事が自然の間違いとした事柄を訂正する転換手術を受けていた。エルベの事例では、記事が記すところでは、彼女と彼女が相談した科学者たちは「造物主が彼を女にしようとしたのだが、何らかのまずいやり方で、その手仕事をしくじったのだと確信するに至った」。典型的な気後れでもって、その報告は性器ないし生殖器への言及を避けていた。それはどんな外科手術でも関わる事柄を明記しなかった。つまり、シュレッケンゴストの手術のひとつが「内分泌腺の病型に関するもの」だったとだけ物語ったのだった。アクセの事例では、アクセが「少女的な役割にまったく固執していないのがわかった」ために、外科手術に至ったことを記事は示唆していた⁽²⁴⁾。

これらの、また、その他の性別変更の物語は、普通でない行動へのショッキングな説明、稀有な生物学的問題、驚くべき外科的解決法をもって、アメリカの読者たちを魅惑しようとした。そうした物語はしばしば主流プレスの周縁に、つまり、煽情的な雑誌やタブロイド紙、あるいは、世間一般の読者に性の科学を提供する『セクソロジー』誌のような出版物に掲載された⁽²⁵⁾。それらは異性的な行動や間性、同性愛、異性装の事例を、時にはなんら区別することなく報道し、また、これらすべてを医療の必要がある相関的な病理として頻繁に描写した。それらは時折、「純粹に精神的な」種類の「性転倒者」に言及したが、彼らを外科手術への資格がない同性愛者として示したのだった⁽²⁶⁾。時として、それらは腺の障害がありそうな女か男が、思春期の末、または成人期に、身体的性差やジェンダー的行動において自然発生的な変化を受けたという変身について報告した。(ある典型的な見出しでは、「少年囚が次第に少女へと変化」とある。)⁽²⁷⁾けれども、概して、記事は外科手術には言及したのだが、それが必然的に意味するものを明示することを怠った。それらは真実であるが隠された生理学的性別の露見として性別変更手術を描写し、こうして、外科的介入を正当化する生物学的な拠り所へと性別変更を結びつけた。これらの物語はしばしば、物質的身体の性差にジェンダー的、また、エロティックな行動の原因を据えることで、ジェンダーやセクシュアリティのステレオタイプを増強した。この二元論的な性差観のなかでは、科学は曖昧な状態から明白な男性ないし女性の性別を創り出して、自然による痛ましい「稀有の失敗」を矯正できるし、そうすべきだとされた⁽²⁸⁾。

1930年代の後半、こういった特集記事は男となったヨーロッパの女の陸上競技者についての広範な報道記事のなかに現れた。1935年、23歳のベルギーのサイクリングのチャンピオン、エルヴィラ・ド・ブリュヌは性別を変更し、ウィリーとして生活を始めた。約1年後、イギリスの砲丸投げと槍投げのチャンピオン、メアリ・イーディス・ルイス・ウェストンは二つの手術を受け、マークという名前を選んだ。そして、チェコスロヴァキアのランナー、ズデンカ・コウブコフは、ある報道が「精密な外科手術」と呼ぶものによってズデニェク・コウブコフとなった。彼が1936年にニューヨークへやって来たために、アメリカのプレスはコウブコフの事件を広範囲で報じた。1913年の誕生時には女性と考えられていたが、コウブコフは女性らしい服装や家庭のしつけに反抗する「完全に男性らしい青年」として成長した⁽²⁹⁾。彼が年を重ねるとともに、「男性らしさの感覚がおのずから主張を始めた」。そして、彼は女に対して性的に欲望し、「彼の想像力はフランス小説を読むことで燃え立った」⁽³⁰⁾。彼は1932年のオリンピックで女として競技し、800メートル走で世界記録を立てた。しかし、20代の初めに、「大いなる光が差し」、彼は男であると悟った⁽³¹⁾。「外科医のメスのひと振り」とだけ評された処置の4ヶ月後、コウブコフはブロードウェイのクラブ、フレンチ・カジノ

で「^{タフロー・ヴィヴァン}活人画」を演じるためにニューヨークへとやって来た。彼は女を追いかけては、後のクリスティン・ヨルゲンセンによるジェンダー的な舞台公演を予示する、単調な舞台を繰り返したのだった⁽³²⁾。プレスの注目は女の競技者への不快感を反映しており、また、運動選手の女は、実際に男でないにしても、少なくとも疑わしい男っぽさがあるという、世間一般の見解を追認していた。しかし、こうした物語は性別変更の可能性へ向けた、さらなる情報発信をも提供していたのだった⁽³³⁾。

コウブコフや他の人たちは、間性のひと、あるいは、わたしたちが今ならトランスセクシ

ュアルと見なすひとだったのだろうか? 1938 年のある擬似科学的なパンフレット、『男となった女たち』は「女の運動選手」が精巣組織の移植によって「性別を変更」することを示唆したが、「わたしたちに正確な情報を提供するには、プレスは神経質すぎる」とも主張した⁽³⁴⁾。とはいえ、『セクソロジー』誌は性別変更の多様な物語を、間性や「抑止的な発育」という説明で報道した⁽³⁵⁾。そうしたある記事で、ジェイコブ・ハブラー医師は、信頼すべき医学雑誌でなんら科学的な説明を得なかったことを認めたとあわせて、通俗的出版物を読むことで明確な結論を引き出すことについては慎重さを示した。それにもかかわらず、彼は性別変更の通俗の説明が間性の手術を指すものと決め込んだ。彼は 1930 年代までには、そうした間性の手術を「なんら新しくも驚くべきでもないもの」と見なしていた。彼は明らかに、外科的性別変更をそれ以上のものと見なさないう、読者に思い止まらせようとしたのだった。「平均的な同性愛(「第三の性」)の傾向や性向がある男や女は、彼ないし彼女が好む性別への変更が誰にでも可能になる新たな発見の入口に、わたしたちが立っていると考えたことはない」と、彼は記した⁽³⁶⁾。彼のアプローチはヒルシュフェルトの研究所のドイツ人医師たちのものとは決定的に異なっていた。ドイツの医師たちは異性装者と名づけた人びとのための選択肢として転換手術を考えて(また、それを施行して)いたのだった。

警告にもかかわらず、ある人びとはまさにハブラーが防ぎたかった仕方で、性別変更の物語を読んでいた。性別変更手術を容認する情報発信は、そこにある可能性を自己に一体化させた人びとの注意を捉えた。『セクソロジー』誌は情報を集めるなかで、読者からの数通の手紙を公表した。1934 年、ある手紙の筆者は次のように説明した。「わたしには特異なコンプレックスがあります—それは『エオニズム』と呼ばれるものだと思います。つまり、わたしは女として服を着たいのです。…わたしは性別変更について、シュタイナッハの手術に関心があります。わたしはもっと情報が欲しいのです」⁽³⁷⁾。1937 年には、「ミス E.T.」が次のように尋ねた。「一度、あるいは、数度の外科手術によって、女性から男性へと変わることが可能なのでしょうか? わたしはそうしたことが行われているという文章を一たいして有益ではなかったのですが一読んだことがあります。…手段について、また、費用についても、何か意見を頂けないでしょうか?」⁽³⁸⁾「彼らは性別を変えたがる」(1937 年)において、『セクソロジー』誌は、ヨーロッパの運動選手たちに関するプレスの報道が、今や「それが可能かどうか、そうであるなら、どうやって、どこで」と尋ねてくる、幾人かの読者を「煽って」きたことを認めた⁽³⁹⁾。この雑誌はほんのひと握りの手紙(MTF と FTM のもの)を要約した。そうした手紙

の断片的な公表は、読者が自己の物語を作るために、どの程度、通俗的な語りを利用したかを知ることを不可能にしてしまうが、ある手紙は何人かの読者が間性の物語を彼ら自身の欲求に一致させていたことを示唆している。自分を「なんら女性的でない」のだが、「明白に(女性の)性別に属している」と述べたある女は次のように尋ねた。「わたしが男性と女性の両方の生殖器を持っているのが真実であれば、わたしがなりたいと願っている男性になるために必要な何らかの手術を受けることは、賢明ではないのでしょうか? わたしのケースに関心がある適任の医師にわたしを紹介して頂けませんか?」⁽⁴⁰⁾

この雑誌は手紙の筆者が探し求めた情報を提供しなかった代わりに、彼らを思い止まらせようとした。ある MTF からの問い合わせへの返信のなかで、編集者は、手紙の筆者が「完

全な精巣除去の手術」を受け、その後は女として生活できることを認めたが、外科手術は「完全に無性の生物」を産み出すだろうと警告した⁽⁴¹⁾。編集者はFTMの寄稿者には無遠慮に言い放った。「正常な女性を正常な男性に変えたり、正常な男性を正常な女性に変えうるような手術は存在しない。あなたが読んだ手術は『半陰陽者』に施行されたものだ」⁽⁴²⁾。1940年代を通じて、『セクソロジー』誌は時には「倒錯者」または「同性愛者」と呼ぶこともあった、そうした読者たちに、医師は間性の場合にだけ、そうした手術を施行するのだと忠告し続けた。それにもかかわらず、その雑誌は女になった男、また、男になった女についての物語を掲載し続け、そして、手紙の筆者は性別変更手術のことを尋ね続けたのだった⁽⁴³⁾。

そのような外科手術は合衆国では受術不可能だった。1904年生まれのだニエル・バス(仮名)の事例を取り上げよう。バスは早い時期から女になりたいという欲求を悟っていた。科学的で通俗的な読み物の食欲な読者であった彼は、医療的介入の可能性を理解し、彼が「女性化手術」と呼ぶものを探し求めた。1930年代から1940年代にかけてのシカゴで、彼は少なくとも八人の医師、主として精神科医の診察を受けたが、誰も助けてくれそうになかった。彼は次のように記した。「わたしはなぜ彼らがわたしを救うために誠実な努力をしてくれないのかが理解できない。文献では、あんなにも多くの患者が直ちに救ってもらえているというのに。…医者たちは、わたしが持つそうした欲求が本物かつ根本的であること、また、わたしがそれらから逃れられないことを、わたしに理解させようとしてきた。それなのに、わたしが自分の欲求を実現する助けを求めると、彼らはそうすることを拒絶するのだ」⁽⁴⁴⁾。1940年代半ばまでに、彼は女性ホルモンと自力での女性化とを追求するため、一時的に外科手術への探求に見切りをつけてしまった。彼は腹部のなかでは精巣が萎縮するだろうと考え、腹部のなかに精巣を束ねることで、自力での女性化を達成できると期待したのだった。彼は「トランスセクシュアル」という言葉を未だに知らなかったのだが、自分を間性者とも同性愛者とも見なさなかった。彼は自分を「真の倒錯者」と名づけていた。「わたしは身体を除いて、あらゆる点で女なのだ」⁽⁴⁵⁾。

バスは性別の変更を望む20世紀半ばのアメリカ人が直面したジレンマを見極めていた。一方では、プレスが性別転換への新たな外科的選択肢を仄めかす、一連の煽情的な物語を出版していた。他方では、アメリカの医師たちは、患者が間性の状態だという納得のゆく主張をなさない限り、治療を提供したり、勧めたりするのを拒絶したのだった。幾人かのアメリカの医師たち、特に精神科医たちは、非間性のトランスジェンダーの患者たちに冷淡な敵意を表わした。シカゴの二人の精神科医は、ある患者の外科手術の要求を、「精神的欠陥に比例した非常識で馬鹿げた、愚かな物言い」の一例だと考えた⁽⁴⁶⁾。20世紀の半ばに差しかかると、だニエル・バスのような自己認識的な倒錯者はますます新たな医療的可能性を追求したがるようになったのだが、彼らが遭遇する抵抗によって、しだいに挫折したり、落胆したりするようになった。バスは次のように述べている。「わたしは唯一の出口として、絶えず自殺を考えていた」⁽⁴⁷⁾。しかし、新たな情報発信のそれぞれが、もうひと筋の希望を与えたのだった。

そして情報発信は続いた。1941年、新聞各紙は、名前をエドワードから改名し、法的な女の身分を手に入れるために、カリフォルニア州上級裁判所[第一審裁判所一記者補足]に申立を行った、バーバラ・リチャーズの物語を特集した。記者たちはその物語を、リチャーズ自

身がそうしたように、自然発生的な性的変容の事例として披露しながら、食欲に追跡していった。当時 29 歳だったリチャーズはロサンゼルスで、2 年前に「何らかの生理学的変化が起こっているのを悟っていた」ことを語った。彼女はひげの生長、音声、皮膚、容姿における変化に注意していた。一般に蔓延るジェンダー・ステレオタイプに執着して、彼女もまた「次第に料理と家事を好む」ようになってきたことを語ったのだった⁽⁴⁸⁾。法廷での申立てで、彼女はみずから女性的特徴が優位となった半陰陽者として、つまり、リリ・エルベのものに著しく類似した物語として描写した。もっとも、後のある説明では、リチャーズは医療専門家が間性の状態に関するいかなる「器質的な証拠」も見出さなかったことを認めたのだが⁽⁴⁹⁾。彼女の事例を医学の会議で発表した、内分泌科医マーカス・グラハムは、リチャーズの変化を小児期の疾患に起因するホルモンの平衡失調に帰したのだった⁽⁵⁰⁾。

この物語は数ヶ月もの間、「母なる自然の悪ふざけがロサンゼルスでセールのスキャンダルを女に変えた」、「わたしの夫は女です」といった仰天するような見出しで紹介され、世間の目に留まったのであった⁽⁵¹⁾。リチャーズと彼の妻、ロレイン・ウィルコクス・リチャーズは、バーバラの幼年時代、彼らの求愛と結婚、そして、性的変容の詳細を詮索好きな世間に説明した。リチャーズが自分を制御不能な変化の犠牲者として描いた一方で、「女になるスリルを感じる」ことを認めていた。リリ・エルベの言葉をこだますように、彼女は自然による許諾を引合いに出した。「わたしは今や自然がわたしを女にしようとしたことを知っている」⁽⁵²⁾。もっとも、この物語が表明したように、新たな詳細は、積極的な人間の介入が、それとなく受動的な変容の物語よりも、大きな役割を担っていたことを示唆していた。10 月、ある新聞は、リチャーズが「容態を安定させる」ために、「女性ホルモンの注射」を受けていることを報道した⁽⁵³⁾。1942 年 1 月、別の記事は、リチャーズが「肉体を…内なる宿命に適合」させるために、「形成手術」を期待していることを示唆した⁽⁵⁴⁾。（のちに世間の視線の外で、ロレイン・ウィルコクス・リチャーズも外科手術とホルモンによって FTM の性別変更を行い、夫婦はバーバラとローレン・ウィルコクスとして一緒に暮らしていた）⁽⁵⁵⁾。

以前のように、そのニュースは性別を転換したいと望む人々の注目を捉えた。ダニエル・バスは正確に何が起きているのかを説明してくれる詳細な情報を探し求めながら、リチャーズ夫妻の報道の後を追った。彼は次のように記した。「1941 年 7 月、新聞各紙は、何らかの自然の気まぐれで女へと変わったある男について書き立てていた。…わたしはこの事件についての必要な情報を得ることができていないという事実に対して、本当に気が狂いそうだ」⁽⁵⁶⁾。別の人物はリチャーズに直接手紙を書いた。「どうやってひげが顔から消えたのか、どうやって乳房が膨らんだのか、このことはわたしが本当にやりたいことであり、あなたと同じようになりたいのです」⁽⁵⁷⁾。『セクソロジー』誌の質問及び回答の部門の編集者だった、医師デイヴィッド・O・コールドウェルもまた、リチャーズのような事例に対する応答を書き留めていた。彼は次のように記した。断続的な「法的変更は、ある個人がある性別から別の性別へと医学的に変容していることを宣告する、十把ひと絡げの尺度での調査報告をもっともらしく見せることにつながる」。彼はこう主張した。そのような報道が「わたしの郵便受けを標的にしてしまうのだ。…ひとつの質問が際立っている。…『どこでわたしはこのことを行えるのですか?』」⁽⁵⁸⁾

そうした要求に直面して、コールドウェルは性別変更の問題について、より広範な出版活動を開始した。1949 年の『セクソロジー』誌の記事において、乳房と卵巣を除去し、「膈を開

鎖し」、「人工の陰茎」を造ってくれる「外科医を見つけるよう」コールドウェルに頼んできた、「アール」の事例を記述するために、「性転換的精神病質」[“psychopathia transexualis”](クラフト=エビングの有名な19世紀の著書、『性的精神病質』[*Psychopathia Sexualis*]の語呂合わせ)という語句を彼は選択した⁽⁵⁹⁾。コールドウェルは外科医がそうした手術を施行できることを認めたが、人工の陰茎が「実質的に使用できず」、「指の爪ほどにも性的感覚がなく」なることを述べて、手術を是認するのを拒絶した。さらには、健全な腺や組織を除去することが医師にとって「犯罪的」であると、彼は考えていた(278)。

初期の記事とこの論説とを区別したのは、独立した性科学的カテゴリーとしての「性転換的精神病質」の定義であった。コールドウェルはこうした外科手術への要求を、間性や腺の障害の事例から引き離した。精神科医のコールドウェルにとって、トランスセクシュアルたちは「主として、好ましくない幼少期の環境の産物」であった(280)。そして、アールは性的には女に惹かれたのだが、その論説はさらにトランスセクシュアルを同性愛者から区別したのだった。挿入されたシュルレアリスティックなイラスト(胸部が接合した双頭の男/女)に付された説明文は次のようにある。「多くの人びとが外科的に変更した性別を持ちたいという抑え難い欲求を持っている。…これらの人びとは必ずしも同性愛者ではないのだ」(274)。コールドウェルは1950年のパンフレット、『トランス-セクシュアルの性生活と性的問題についての質問と応答』で洗練させた。パンフレットの副題は次の重要点を要約していた。「トランス-セクシュアルとは、身体的にはある性別でありながら、心理的には明らかに反対の性別である人びとのことだ。トランス-セクシュアルには異性愛者、同性愛者、両性愛者、その他の人びとが含まれている。大部分の異性装者にはトランス-セクシュアルの傾向がある」。このようにして、コールドウェルは生物学的性差やセクシュアリティから、心理学的性差を表わすジェンダーを切り離した。異性としてのアイデンティティ形成と外科手術への要求は、必ずしも、間性の状態にも、同性への欲望にも結びつけられなかったのだ。

定義を構築するなかで、コールドウェルは、彼が今や「トランス-セクシュアル」と呼ぶ人びとの手紙を頼りにしていた。彼はおびただしい文通を行っていた—ある部分は『セクソロジー』誌の編集者として、大部分には、対抗文化的な「自由思想」の出版社、ハルデン=ジュリアス出版の人気あるブルー・ブックのシリーズから出された、性に関する多くのパンフレットの著者として⁽⁶⁰⁾。トランスセクシュアルについてのパンフレットでは、コールドウェルは自分が受け取った手紙から大幅に引用していた。幾人かの手紙の筆者はすでに外科的可能性の考えを表明しており、時として彼らは自分たちの知識が雑誌、新聞、性科学的な書物で読んだ事柄を直接に参照したものであることを説明した。14年の間、女として生活してきた、33歳のMTFの異装者は次のように記した。「あらゆるものが、わたしが女になるという燃える欲求を育んできた事実へと導いている。わたしは多くのそのような例を読んできた。記事は日常の出版物に現れており、きっと真実であるに違いないのだ」⁽⁶¹⁾。コールドウェルは外科手術への頑なな要求に苛立ちを露わにした。彼は「空想的な希望」を創り出したことで医学を非難し、また、「魔法のような治療や外科医による魔術的な妙技の話」を公表したことで通俗的雑誌各誌を非難した⁽⁶²⁾。

実に、世紀の半ばまでには、幾つかのアメリカの大衆誌、特に煽情的な傾向の雑誌は、もはや性別変更手術が間性の状態だけのものとは主張しなかった。ある記事はこう述べた。「外科手術に加えてホルモンによって、そう遠くない将来、…医者たちが完全に発育した正常な

成人を捕まえて—もし彼ないし彼女が望むなら—性別を完全に転換できることはほとんど疑いない」⁽⁶³⁾。別の記事はそれに同意した。「性別が可變的であるという事実は、生理学的に女へ変わった男たち、また、男へ変わった女たちの明確な実例において説明されている」⁽⁶⁴⁾。雑誌各誌が主張するように、医師たちは非間性の患者の身体的な性的特徴を変更することができた。しかし、合衆国では、彼らはなおも、概して、そうすることを拒絶したのだった。通俗的な文献が次第に外科的な性別変更の可能性を広めるようになった一方で、同情的な医師ですら手術を準備できなかったのだ。

内分泌科医ハリー・ベンジャミン—ドイツで生まれ育ち、教育を受けた—は 1913 年に合衆国へやってきて、老化と売春に関する専門家として自己を確立した。1949 年、彼はアルフレッド・キンゼーに紹介された、初めてのトランスセクシュアルの患者、リン・バリー(仮名)に出会った。ベンジャミンは自身を「一匹狼ないし無頼漢」、つまり、トランスジェンダーの患者のために介入することに、アメリカ生まれの医師たちがしばしば示したのと同じようには躊躇しない、性的自由への擁護者であると思なしていた⁽⁶⁵⁾。内分泌科医として、彼は精神療法での試み以上に、ホルモン治療や腺への外科手術により大きな信念を据えた。シュタイナッハとヒルシュフェルトの友人であり、信奉者であった彼は、異性としてのアイデンティティ形成には何らかの生理学的原因があると想定し、トランスセクシュアルたちを彼の医療的援助を必要とする絶望的な患者であると考えた⁽⁶⁶⁾。

すでに女として生活していた MTF のリン・バリーは、幼少時代のほとんどを少女として過ごしてきた。1948 年、22 歳で、彼女は精神科的検査のため、故郷のウィスコンシン州の病院に入院した。他の多くのトランスジェンダーの人びとのように、彼女は『男から女へ』を含めた性差や性科学についての多様な著作を読んでいて、今や「外科的に変更する欲求」を表明したのだった。彼女は「精神的に女性でいる欲求」の消去を企図する「脳外科手術」を含めた、「他のいかなる選択肢を考慮することをも拒絶した」⁽⁶⁷⁾。30 名以上の病院スタッフが彼女の症例を議論するために会合し、精巣除去と形成外科手術を促した。しかし、州検事総長事務所は「その手術が重傷害罪を構成するものと裁定した」⁽⁶⁸⁾。ロボトミーに対しては、同様の異議はなかったようなのだが⁽⁶⁹⁾。

1949 年 5 月、バリーはベンジャミンに手紙で助けを求めた。彼女の治療歴を読んだ後、ベンジャミンはドイツでの法律が規定する事柄を知るために、ドイツに手紙を出すことを約束した。そうするうちに、彼は女性ホルモンを勧めて、「ひげの発育を除去するための顔への X 線治療」ばかりでなく、「X 線による去勢」の可能性をも提起した⁽⁷⁰⁾。1949 年の夏、サンフランシスコのオフィスで、彼はバリーへのホルモン投与、そして、合衆国内の外科医の調査を開始した。彼はカリフォルニアでの去勢の合法性に関して、地方検事(のちの知事)エドモンド・G・ブラウンに連絡をとった。再度、その合法性について尋ねた後、彼はブラウンに返信し、次のように苛立った。「どうしたらこの国のどこかの外科医がそうした手術を何とかして施行できるのか、わたしには検討がつかない」⁽⁷¹⁾。すぐ後で、サンフランシスコのラングリー・ポーター診療所の精神科医たちは外科手術への是認を拒絶し、また、当初は同情的だったシカゴのある外科医も援助できなくなった。リン・バリーが最終的にスウェーデンで外科手術を受けたのは、ヨルゲンセンへの世間の注目の後、1953 年になってからだった。

(とみやす・あきひこ 本研究科博士後期課程)

訳者補足

本稿は字数制限上、原論文の前半部分(159-171 頁)を「前編」として訳出したものである。「後編」については、次号に掲載する予定である。以下、訳語の選択について補足する。

タイトルにもある“sex change”は、従来、「性転換」と訳されてきたが、煽情的な含みを避けるため、また、法的変更の問題も踏まえた上で、敢えて「性別変更」と訳出した。それに伴い、“sex change surgery”も「性別変更手術」と訳してある。さらに、“sex reassignment surgery”については、現在、日本で使用されている「性別適合手術」を充てた。(ただし、“sex reassignment”は文脈上、「性別再指定」とした。)

次に、“transvestism”については、従来、「服装倒錯(症)」と訳されてきたが、その差別的な含みを避けるため、「異性装」と訳出した。また、“cross-dressing”については、著者が“transvestism”と区別して用いているため、敢えて「異装」と訳出した。さらに、ジェンダーの移行を表わす“male-to-female”/“female-to-male”については、それぞれ、日本でも通用している「MTF」、「FTM」と表記した。

原註

初期の草稿に洞察力をもって眼を通してくれた、リサ・ダガン、ディアドリ・マクロスキー、パット・スウオウプ、ジェニファー・テリー、そして、とりわけ、スーザン・ストライカーに感謝する。優れた調査の補助に対して、カーステン・ガードナーに感謝する。この論文のための調査は、社会科学リサーチ・カウンシルのセクシュアリティ研究助成金プログラム、及び、シンシナティ大学のチャールズ・フェルプス・タフト基金により助成された。

(1) “Christine and the News,” *Newsweek*, 15 December 1952, 64.

(2) 「パッシング」については、以下の文献を参照のこと。Jonathan Katz, ed., *Gay American History: Lesbians and Gay Men in the U.S.A.* (New York: Avon, 1976), 317-422; San Francisco Lesbian and Gay History Project, “She Even Chewed Tobacco”: A Pictorial Narrative of Passing Women in America,” in *Hidden from History: Reclaiming the Gay and Lesbian Past*, ed. Martin Bauml Duberman, Martha Vicinus, and George Chauncey Jr. (New York: New American Library, 1989), 183-94; Louis Sullivan, *From Female to Male: The Life of Jack Bee Garland* (Boston: Alyson, 1990). [「パッシング」(passing)とは、他のひとに、みずから望む性別として認識されること。一訳者補足]

(3) わたしは間性[intersex]という語を、今日一般的に使用されるように、生殖腺、生殖システム、ないし生殖器が性的に曖昧な状態を指すために用いている。「間性」とは、ある性別の生殖腺が多様な形態の生殖器の曖昧さと併存する、半陰陽[hermaphroditism]というより古いカテゴリーを含んでいる。異性装者[transvestite]という言葉の使用については、わたしはヨーロッパの性科学者、特に、異性としてアイデンティティを形成する人びとに性別変更手術を勧めた、マグヌス・ヒルシュフェルトにより選択された用語を採用している。20 世紀中期を通じて、この語は、性別変更への欲求を表明する非間性の人びとを描写する医療的文献、通俗的文献のなかに頻出した。わたしはこうした「異性装者」が、いわゆる異性への確実な同一化を欠く異装者[cross-dressers]のみであった、と示唆するつもりはない。わたしの主眼点は、異性としてのアイデンティティ形成やホルモン及び外科手術による身体的変更への欲求が、英語の用語、

トランスセクシュアル[transsexual]に先立つということである。

(4) Bernice L. Hausman, *Changing Sex: Transsexualism, Technology, and the Idea of Gender* (Durham, N.C.: Duke University Press, 1995), 119. 以下の文献も参照のこと。Vern L. Bullough and Bonnie Bullough, *Cross Dressing, Sex, and Gender* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1993), chap. 11, and Gordene Olga MacKenzie, *Transgender Nation* (Bowling Green, Ohio: Bowling Green State University Popular Press, 1994), chap. 2. ハウスマン、パロー夫妻、マッケンジーは皆、こうした一般的な年代記に従っている。彼らは個々の初期の手術例を承知しているが、1949 年以前の性別変更のより複雑な歴史を看過している。

(5) 以下の文献を参照のこと。Richard Green, “Mythological, Historical, and Cross-Cultural Aspects of Transsexualism,” in *Transsexualism and Sex Reassignment*, ed. Richard Green and John Money (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1969), 13-22; Vern L. Bullough, “Transsexualism in History,” *Archives of Sexual Behavior* 4 (1975): 561-71; and Leslie Feinberg, *Transgender Warriors: Making History from Joan of Arc to RuPaul* (Boston: Beacon, 1996).

(6) 合衆国の歴史における近年の例としては、以下の文献を参照のこと。Lisa Duggan, “The Trials of Alice Mitchell: Sensationalism, Sexology, and the Lesbian Subject in Turn-of-the-Century America,” *Signs: Journal of Women in Culture and Society* 18 (1993): 791-814; Elizabeth Lapovsky Kennedy and Madeline Davis, *Books of Leather, Slippers of Gold: The History of a Lesbian Community* (New York: Routledge, 1993); George Chauncey, *Gay New York: Gender, Urban Culture, and the Making of the Gay Male World, 1890-1940* (New York: Basic Books, 1994); Katie Gilmartin, “‘We Weren’t Bar People’: Middle-Class Lesbian Identities and Cultural Spaces,” *GLQ* 3 (1996): 1-51.

- (7) Teresa de Lauretis, *The Practice of Love: Lesbian Sexuality and Perverse Desire* (Bloomington: Indiana University Press, 1994), xix.
- (8) 近年に編まれた読者反応批評への概説としては、次の文献を参照のこと。Andrew Bennet, ed., *Readers and Reading* (New York: Longmans, 1995). 読者とポピュラー・カルチャーについては、例えば、以下の文献を参照のこと。Janice Radway, *Reading the Romance: Women, Patriarchy, and Popular Literature* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1984), and John Fiske, *Understanding Popular Culture* (Boston: Unwin Hyman, 1989).
- (9) Eugen Steinach, *Sex and Life: Forty Years of Biological and Medical Experiments* (New York: Viking, 1940), 66.
- (10) シュタイナッハは同性愛的行為のホルモンの基盤を発見したことをも仄めかしていた。彼の後の著作のひとつは、去勢され、次に、異性愛の男から外科的に摘出した停留精巣を移植された、同性愛の男たちの「治癒」の報告を含んでいた。シュタイナッハについては、以下の文献も参照のこと。Harry Benjamin, "Eugen Steinach, 1861-1944: A Life of Research," *Scientific Monthly* 61 (1945): 427-42; *Sexual Anomalies and Perversions: A Summary of the Work of the Late Dr. Magnus Hirschfeld, Compiled as a Humble Memorial by His Pupils* (London: Francis Aldor, 1944 [1938]), 172-77. シュタイナッハの先駆者たちについては、次の文献を参照のこと。John Money, "The Genealogical Descent of Sexual Psychoneuroendocrinology from Sex and Health Theory: The Eighteenth to the Twentieth Centuries," *Psychoneuroendocrinology* 8 (1983): 391-93.
- (11) Earl Lind, *Autobiography of an Androgyne* (New York: Medico-Legal Journal, 1918), 196.
代名詞についての注記。わたしは男性として自己を呈示する人へは男性の代名詞を用い、女性として自己を呈示する人へは女性の代名詞を用いる。引用文では、原文で使用された代名詞を改めていない。
- (12) J. Allen Gilbert, "Homo-Sexuality and Its Treatment," *Journal of Nervous and Mental Disease* 52 (October 1920): 297-322, quotation on 321. ギルバートの論説では、ハートは「H」と名指されている。ジョナサン・カツツによる追跡はハートのアイデンティティを明らかにしている。次の文献を参照のこと。Katz, *Gay American History*, 419.
- (13) Max Marcuse, "Ein Fall von Geschlechtsumwandlungstrieb," *Zeitschrift für Psychotherapie und Medizinische Psychologie* 6 (1916): 176-93.
- (14) Harry Benjamin, *The Transsexual Phenomenon* (New York: Julian Press, 1966), 252; Niels Hoyer, ed., *Man into Woman: An Authentic Record of a Change of Sex* (New York: Dutton, 1933), xi.
- (15) *Sexual Anomalies and Perversions*, 179, 218.
- (16) Magnus Hirschfeld, *Transvestites: The Erotic Drive to Cross Dress* (New York: Prometheus Books, 1991 [1910]), 235.
- (17) Felix Abraham, "Genitalumwandlung an zwei männlichen Transvestiten," *Zeitschrift für Sexualwissenschaft und Sexualpolitik* 18 (10 September 1931): 223-26, quotation on 223.
- (18) Hoyer, *Man into Woman*, 284.
- (19) エルベの死とヒルシュフェルトや性科学研究所の係わりについては次の文献を参照のこと。Preben Hertoft and Teit Ritzau, *Paradiset er ikke til salg: Trangen til at være begge køn* (Paradise is not for sale: the desire to be both sexes) (Denmark: Lindhardt og Ringhof, 1984), 82-83. 1931年にドイツで行われた別のMTFの外科手術の詳細については、ハータ・ウィンドに関する以下の記事を参照のこと。"Legal Fight over Sex Change Book," *Daily Telegram*, 5 January 1955, in ONE/International Gay and Lesbian Archives (ONE/IGLA), University of Southern California, Los Angeles, Calif., file: Changelings; and "His Two Sons Began to Call Him 'Auntie,'" n.d. [1950s], Christine Jorgensen Scrapbook, Louise Lawrence Collection, the Kinsey Institute for Research in Sex, Gender, and Reproduction, Indiana University, Bloomington, Ind. (KI), n.p.
- (20) Daniel Bass [pseud.], letter to Alfred C. Kinsey, 14 December 1947, correspondence file: Daniel Bass, KI.
- (21) Hoyer, *Man into Woman*, 178. 半陰陽との主張は信じ難い。1930年代末までに、その分野で随一の専門家、ヒュー・ハンブトン・ヤングはたった20例だけの医学的に確認された半陰陽の症例を見いだしており、リリ・エルベの物語のような、骨盤内に二つの卵巣を持ち、陰嚢に二つの精巣を持つ者は誰ひとりいなかった。次の文献を参照のこと。Hugh Hampton Young, *Genital Abnormalities, Hermaphroditism and Related Adrenal Diseases* (Baltimore: Williams and Wilkins, 1937), 200-201.
- (22) *Ibid.*, xi-xii.
- (23) "A Man Becomes a Woman," *Sexology*, December 1933, 250-54, quotations on 252, 253-54.
- (24) "When Science Changed a Man into a Woman!" n. d. [ca. 1934], "Order Book" scrapbook, box 1/1 scrapbooks, Virginia Prince Collection, Special Collections, Oviatt Library, California State University at Northridge, Northridge, Calif. (CSUN), n. p.
- (25) 煽情的な文体で、『セクソロジー』誌はしばしば性の科学のより未知の側面を強調した。『セクソロジー』誌の創刊者、編集者、出版者のヒューゴー・ガーンズバックが最初の低俗SF雑誌をも出版したことは偶然の一致ではない。このつながりを指摘してくれたスーザン・ストライカーに感謝する。ガーンズバックについては、次の文献を参照のこと。Mark Siegel, *Hugo Gernsback, Father of Modern Science Fiction* (San Bernardino: Borgo, 1988).
- (26) "Man in Woman's Body," *Your Body*, September 1937, 12-15, quotation on 15.

- (27) "Boy Prisoner Slowly Changing into a Girl," n. d. [ca. 1936], "Order Book" scrapbook, box 1/1 scrapbooks, Virginia Prince Collection, CSUN, n. p.
- (28) "When Science Changed a Man into a Woman!" 2.
- (29) Gordon Kahn, "[Bad-Old] Days of Newly-Made Man," *New York Daily Mirror*, n. d. [ca. 1936], "Order Book" scrapbook, box 1/1 scrapbooks, Virginia Prince Collection, CSUN.
- (30) Gordon Kahn, "Boy Ex-Girl 'Corsetiere,'" *New York Daily Mirror*, n. d. [ca. 1936], in *ibid.*
- (31) "Former Girl Athlete Arrives, Now a Man," in *ibid.*
- (32) Gordon Kahn, "Once Girl, He Talks of Loves," *New York Daily Mirror*, n. d. [ca. 1936], and Gordon Kahn, "Koubkov Met Love at Track," *New York Daily Mirror*, n. d. [ca. 1936], both in *ibid.*
- (33) 例えば、次の文献を参照のこと。Brett Riley, "Are Sexual Changes Possible?" n. d. [late 1930s or 1940s], box 1/4 clippings, Virginia Prince Collection, CSUN, n. p.
- (34) Joseph McCabe, *Women Who Become Men: The Development of Unusual Variations, Including Hermaphrodites, Pseudo-Hermaphrodites, and Virgin Birth* (Girard, Kans.: Haldeman-Julius Publications, 1938), 29.
- (35) "Women into Men by Surgery?" *Sexology*, August 1936, 774-75, quotation on 775.
- (36) Jacob Hubler, "Science Turns Girl into Boy," *Sexology*, November 1934, 156-58, quotation on 158.
- (37) "Dissatisfaction with Sex," *Sexology*, August 1934, 810.
- (38) "Changing Sex," *Sexology*, December 1937, 265.
- (39) "They Want to Change Sexes," *Sexology*, September 1937, 32-35, quotation on 32.
- (40) *Ibid.*
- (41) "Dissatisfaction with Sex," 810.
- (42) "Changing Sex," 265.
- (43) 記事については、以下のものを参照のこと。"Woman into Man," *Sexology*, March 1944, 484-85, and David O. Cauldwell, "A Man Becomes a Woman," *Sexology*, September 1946, 73-79, and October 1946, 149-52. 手紙については、以下のものを参照のこと。"Homosexuality," *Sexology*, November 1942, 390, 392; "Man into Woman?" *Sexology*, August 1946, 59-60; "Man into Woman," *Sexology*, December 1946, 312; and "Desire to Be of the Opposite Sex," *Sexology*, August 1948, 53.
- (44) Daniel Bass [pseud.], "Case History," n. d., TV-BNJ notebook, Harry Benjamin Collection, KI, 7, 9.
- (45) Daniel Bass [pseud.], letter to Alfred C. Kinsey, 2 November 1945, in *ibid.*
- (46) D. M. Olkon and Irene Case Sherman, "Eonism with Added Outstanding Psychopathic Features," *Journal of Nervous and Mental Disease* 99 (January-June 1944): 159-67, quotation on 166.
- (47) Daniel Bass [pseud.], letter to Alfred C. Kinsey, 20 October 1945, TV-BNJ notebook, Harry Benjamin Collection, KI.
- (48) "Man' Asks Legal Right to Assume Woman Status," *Los Angeles Examiner*, 3 July 1941, TV Barbara Richards envelope, no. 82, diary room, KI.
- (49) Barbara Ann Richards, as told to Bart Lytton, "Nature Betrayed My Body," *Sensation*, November 1941, box 1/4 clippings, Virginia Prince Collection, CSUN, 88.
- (50) "Young Bride Won't Leave Mate Who's Victim of Sex Change," *Oakland Tribune*, 4 July 1941, "Photo and Return" scrapbook, Louise Lawrence Collection, KI.
- (51) "Prank by Mother Nature Turns Los Angeles Salesman into Woman," *Los Angeles Times*, 3 July 1941, TV Barbara Richards envelope, no. 82, diary room, KI; Lorraine Wilcox Richards, "My Husband is a Woman," n. d. [ca. 1941], blue notebook, box 1/1 scrapbooks, Virginia Prince Collection, CSUN, n. p.
- (52) Richards, "Nature Betrayed My Body," 88.
- (53) "Edward Changes Name to Barbara," *Los Angeles Herald Express*, 10 October 1941, TV Barbara Richards envelope, no. 82, diary room, KI.
- (54) Myron Weiss, "The Husband Who Changed into a Woman," *Spot*, January 1942, in *ibid.*
- (55) ローレン・ウィルクスについては、次の文献を参照のこと。Louise Lawrence autobiography, large box, Louise Lawrence Collection, KI, 71-72; Louise Lawrence diary, 28 May, 2 June, 28 June 1944 in *ibid.*; Louise Lawrence, letter to Alfred C. Kinsey, 21 September 1950, folder: Alfred C. Kinsey, in *ibid.* また、次の文献も見よ。Karl M. Bowman and Bernice Engle, "Medicolegal Aspects of Transvestism," *American Journal of Psychiatry* 113 (January 1957): 587.
- (56) Daniel Bass [pseud.], letter to Alfred C. Kinsey, 13 February 1948, TV-BNJ notebook, Harry Benjamin Collection, KI.
- (57) "A. O.," letter to Barbara Richards, 30 May 1942, TV Barbara Richards envelope, no. 82, diary room, KI.
- (58) David O. Cauldwell, *Questions and Answers on the Sex Life and Sexual Problems of Trans-Sexuals* (Girard, Kans.: Haldeman-Julius Publications, 1950), 5-6.
- (59) David O. Cauldwell, "Psychopathia Transsexualis," *Sexology*, December 1949, 276, 278.
- (60) Jim Kepner, "Excavating Lesbian and Gay History," *ONE/IGLA Bulletin* 2 (spring/summer 1996): 9.
- (61) Cauldwell, *Questions and Answers*, 13.
- (62) *Ibid.*, 24.
- (63) Gene St. Ledges, "Can Science Switch Sexes?" *Whisper*, January 1950, box 1/4 clippings, Virginia Prince Collection, CSUN.
- (64) "Would Your Change Your Sex?" *Glance*, March 1950, box 1/1 scrapbooks, Virginia Prince Collection, CSUN.

⁽⁶⁵⁾ Tom Buckley, "Transsexuality Expert, 90, Recalls 'Maverick' Career," *New York Times*, 11 January 1975, B1.

⁽⁶⁶⁾ ベンジャミンの合衆国での経歴については、次のものを参照のこと。Harry Benjamin, "Reminiscences," *Journal of Sex Research* 6 (February 1970): 3-9.

⁽⁶⁷⁾ "Medical Report on Lynn Barry (pseudonym)," 19 July 1948, TV-BNJI notebook, Harry Benjamin Collection, KI, 2, 3.

⁽⁶⁸⁾ Lynn Barry [pseud.], letter to Harry Benjamin, 19 May 1949, in *ibid.*

⁽⁶⁹⁾ 重傷害法については、次の文献を参照のこと。Robert Veit Sherwin, "The Legal Problem in Transvestism," *American Journal of Psychotherapy* 8 (April 1954): 243-44.

シャーウィンは以下のように記している。「患者の同意のもとに、こうした手術を施行することを医師に対して明確に禁ずる法律はない。それにもかかわらず、そうした手術を施行するのは非合法になると、医師に通告しない郡の地方検事はほとんどいない。その声明の根拠を求めるなら、地方検事は重傷害法を指摘するだろう。その法律がそうした馬鹿げた非科学的なやり方で用いられることは滅多にない。…それは男たちを軍隊の戦士として無能にしないための、かつての国王の方策だったのだ。…男性の生殖器を除去することが重傷害でないことは、ほとんど疑いないだろう。…しかしながら、まさにこの法規こそが、そうした手術が医師側の犯罪となる理由として引用されているのだ」。どの記述に当たっても、性別再指定に携わった外科医で重傷害法により起訴されたものはいない。より一般的には、外科医たちは他の理由で性別変更手術に携わるのを躊躇したのだった。たとえば、彼らは医学界での名声を気にかけていたし、また、責任訴訟を恐れてもいた。1960年代まで、医師や弁護士たちは性別適合手術を拒否する釈明として、重傷害法を利用するのに終始した。

⁽⁷⁰⁾ Harry Benjamin, letter to Lynn Barry, 31 May 1949, TV-BNJI notebook, Harry Benjamin Collection, KI.

⁽⁷¹⁾ Harry Benjamin, letter to Edmund G. Brown, 22 November 1949, in *ibid.*